

平成30年8月20日(月)

盂蘭盆会

お盆の日の8月13日は、今の時代は朝早く6時頃からお寺にお参りをし、自分の家のお墓と知り合いのお墓に花をあげたりご焼香したりと、寺の境内とお墓の周りにひっきりなしに人が行き来するようになった。和尚さんも、本堂を5時前から開けて、読経や挨拶に余念がない。

私が子どもの頃のお盆は、午後6:00過ぎの早い時間にそーめんを家族で食べ、大きなやかんに家の水を汲み入れ、供物や花を持って、一家総出で、お墓に向かったものだった。

お寺に着くと、お堂に上がり、ご本尊の阿弥陀如来に線香を上げ、時刻が時刻だけに、心の中がざわざわし始めていく。とどめは、お盆の時期に飾られる地獄の絵図だ。針の山や油の池で身もだえている人々の顔とその人々をさいなんでいる鬼の姿が目には焼き付くと、夜になって夜具の中に入っても眠ることができず、うんうんと苦しい思いでいたことを今更ながら思い出す。

お寺とお墓から家に帰ると、迎え火をたくのが習慣であった。うずたかく30センチ以上に組んだ木組みに火をつけると、松の木が焼ける独特の匂いと高くまで上がる炎が夜の中にひときわ映えて、荘厳な気持ちになるのである。周囲の向3軒両隣の家々の門口には、その炎の列が一時続き、来るときはなるべく早く来るために馬に乗って、帰るときはなるべく遅く行くために牛に乗っていくという祖母の話を聞いているので、その炎の列を見て、仏たちが胡瓜の馬に乗って家に帰ることをまさしく体現していたものであった。

実家に集まった従兄弟たちは、その迎え火を元に花火をする。いつまでも続く夜の雰囲気と、仏たちがうろちょろしているであろう闇の中の様々な音に、盂蘭盆の時間を子どもながらに楽しんでいたことを思い出す。

今は、お墓参りから帰ると町うちの新盆のお宅に伺って、お線香を上げ、麦茶を飲んで、近頃のとりとめもない話をし、熱い中大変ですねなど声をかけられ、また声をかけ、次から次へと十数件の家を回って歩くのである。

遠方へは、14日に出かける。遠くいわきのあちらこちら、果ては白河、会津の方まで今年はお出かけることとなった。

16日には、お盆を送る。お盆を送ると、既に秋の風情である。

8月2日夜にアリオスに於いてオペラ「愛の妙薬」を見たが、主人公にとってだまされて買ったワインが恋人との仲を取り持つ妙薬になったという落ちであった。

オペラを聴きながら、これはイタリア語を分かって聞くか聞かないかでは全然違うなあと思いに至った。きっとイタリア語が分かれば、もっとその歌の感情に移入できるし、声のすばらしさも体感できると思うが、なにぶん歌の歌詞も分からず、何となく全体の筋書きも説明していただいているので、まあこんなものかという感じだけであるのが心許ない。

その中で、受験生の「妙薬」は、いったい何だろうとずうっと考えていた。

歌っている山際君にとって、芸大合格の「妙薬」は意地と決心であった。ソフトテニス

部を最後まで貫いての音楽への転身は見事であった。

今の受験生達には、この意地と決心はあるのか。

結論を言おう。間違いない。ひとりひとりにまさしく意地と決心がある。ふと見せるひとりひとりの生徒の横顔の頬に「意地」「決心」が刻まれている。

3年生諸君に一句を送ろう。

妙薬はなくとも秋の実りあり